

農業技術情報

令和5年7月1日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の遅速(7月1日現在) ()内は平年値 移植てん菜のみ3町平年値の平均

作物名	遅速日数	生育状況		農作業状況
秋まき小麦	+4	草丈 71.3 (76.3) cm 穂長 8.9 (8.8) cm 穂数 587 (673) 本/m ²	乳熟期 6/26 (6/30)	
ばれいしょ	+2	茎長 62.3 (61.0) cm 茎数 3.9 (3.6) 本	開花期 6/25 (6/27)	
大豆	+5	茎長 32.0 (21.6) cm 葉数 5.5 (3.5) 枚		
小豆	+4	茎長 10.0 (6.7) 葉数 3.6 (2.3)		
菜豆(金時)	+4	茎長 18.3 (14.8) 葉数 3.2 (2.4)		
菜豆(手亡)	+4	茎長 17.9 (10.4) 葉数 4.0 (3.2)		
てん菜(移植)	-	草丈 49.2 (48.5) cm 葉数 16.0 (18.8) 枚		
てん菜(直播)	+4	草丈 42.1 (37.2) cm 葉数 17.2 (14.1) 枚		
牧草	+2	草丈 11.3 (9.1) cm		収穫始 6/12 (6/13) 収穫期 6/21 (7/3)
サイレージ用 とうもろこし	+1	草丈 93.3 (72.0) cm 出葉数 9.9 (9.7) 枚		
たまねぎ	+4	草丈 55.6 (51.0) cm 生葉数 6.5 (6.0) 枚 葉鞘径 15.5 (13.4) mm		

畑作

<秋まき小麦>

1 赤かび病の防除

生育の進捗は4日進んでいます。平年に比べ稈長は同程度ですが、穂数が少なくなっています。

生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、3回目以降の防除を実施してください。

表1 赤かび病の防除体系

回数	農薬名	使用倍率	DON 低減効果	対ニバーレ 防除効果	赤さび病
3回目	シルバキュアフロアブル	2,000倍	●		●
臨機	チルト乳剤25	1,000~2,000倍	●		○/●

●道指導参考あり ○登録あり指導参考なし

※DMI剤は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるので飛散に注意する。

<ばれいしょ>

1疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18~20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地（排水不良箇所）、トラクタの車輪のぬかるんだところ（防除畦など）、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。

- (1) 初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
- (2) 初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。
- (3) 作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
- (4) 降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れられない状況が予想される場合は、Wインターバル(14日間隔)効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください

※Wインターバル(14日間隔)効果のある薬剤

「リライアブルフロアブル800倍」、「プロポーズ顆粒水和剤750倍」、「ライメイフロアブル2,000倍」、「レーバスフロアブル1,500倍」、「ランマンフロアブル1,000倍」、「フロンサイドSC1,500倍」(平成25年度指導参考)。

表3 疫病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率(倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	効果の発現
リライアブルフロアブル	800~1,000	7日	3回	予防・治療
ゾーベックエンカンティアSE	2,000	14日	3回	予防・治療
フロンサイドSC※	1,000~2,000	7日	4回	予防
プロポーズ顆粒水和剤	750~1,000	7日	5回	予防・治療

※「フロンサイドSC」は1,000倍で菌核病、2,000倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

2軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降(7月上旬)となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を行いましょう。初期防除を心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

防除薬剤例は、6月15日付けの技術情報を参照してください。

3アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「やや早」、発生量は「やや多」と予想されています（北海道病害虫防除所「7月予報」）。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

防除薬剤例は、6月15日付けの技術情報を参照してください。

〈豆類〉

1中耕

遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2小豆「褐斑細菌病」の防除

6月中旬から初生葉に病斑がみられ、その後7月中旬頃が冷涼多湿な場合に急激にまん延します。また、発生時の中耕除草作業で発生範囲がさらに広がります。

初発が確認された場合は、速やかに抜き取るとともにカスミンボルドーによる防除を実施し、その1週間後に2回目の防除を実施してください。

3小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表4 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
ランマンフロアブル	1,000	7日	3回
レーバスフロアブル	2,000	7日	3回
フェスティバルC水和剤	600	7日	3回

4小豆のマメアブラムシの防除

一部ほ場では既に発生がみれています。多発すると防除が困難になることがあるので、寄生が確認されたら寄生株が拡大する前に防除を実施しましょう。

表5 「マメアブラムシ」の防除薬剤例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モスピランSL液剤	2,000~4,000	14日	3回
ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回
ウララDF	4,000	7日	2回

5菜豆の「根腐病」発生時の対策

根腐病に罹ると、根、胚軸に赤褐色～黒褐色の不定型な病斑が生じ、葉の黄化や地上部の萎凋症状などの生育不良となります。発病株が見られたら、健全部の新根の発生を促すため、窒素成分で2 kg/10a 程度の追肥と培土を行ってください。

6菜豆の「灰色かび病・菌核病」の防除

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。生育状況に合わせ、適期防除に努めてください。

菜豆防除適期	1 回目：開花始後5～7日目	2 回目：1 回目防除の10日後 (開花始：全株の5%が開花した日)
--------	----------------	---------------------------------------

表5 菜豆菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病
1 回目	オルフィンフロアブル※1	2,000	7日	3回	—
2 回目	ブロードワン顆粒水和剤※2	1,000	14日	4回	○
	または プライア水和剤	1,000	14日	4回	○
3 回目	ファンタジスタ顆粒水和剤※3	2,000	7日	3回	○

※1 「オルフィンフロアブル」は炭そ病に効果がないため、炭そ病発生ほ場では「ブロードワン」を使用するか、「トップジンM水和剤」との併用で対応する。

※2 「ブロードワン顆粒水和剤」はチオファネートメチルを含むので、トップジンMとの総使用回数(4回)に注意。

※3 病害の発生が多い場合に3回目検討(インゲンマメゾウムシ対策の「バイスロイド乳剤」2,000倍と同時散布)

7豆類の窒素追肥

根粒菌が行う窒素固定の量は、豆類の生産性を大きく左右します。大豆>小豆>菜豆の順に根粒菌による窒素固定量が多くなっています。

排水の悪いほ場では根粒菌の着生量が少なくなりがちなので確認しましょう。また、前作や地力、前作付時の葉落ちの良否を勘案し追肥を検討してください。

表6 豆類の窒素追肥時期と追肥量の目安

作物名	追肥時期	追肥量の目安	備考
大豆	開花期頃	N：2～4 (kg/10a)	生育後期に窒素供給が多いほ場では追肥量を減らす
小豆	第3本葉展開期前後 (7月上中旬)		
金時	開花期頃		葉落ちが悪いほ場、生育後期に多量の窒素が供給されるほ場では追肥量を減らす

野 菜

<ヤマノイモ>

1 中耕と埋め戻し

- ・根が畦間に伸び始めているため、中耕は7月上旬までに終わらせましょう。
- ・トレンチャー溝の陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行ってください。

2 除草剤の生育期処理

- ・畦間土壌処理は、茎葉（下葉）に飛散しないように行ってください。

3 分肥の施用時期(とちち太郎)

- ・分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。
- ・とちち太郎は従来品種（川西系統）よりも後半の生育が旺盛です。緩効性肥料を使用していない場合は、安定栽培のために分肥を実施してください。

<たまねぎ>

ネギアザミウマおよび白斑葉枯病の発生が見られます。

茎葉が繁茂していることから、防除の際は散布水量を増やしましょう。

1 ネギアザミウマの防除

一部で密集して寄生している株が確認されています。引き続き注意が必要です。

表1 たまねぎネギアザミウマの防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数
7月上旬	ディアナSC	2,500~ 5,000	収穫前日	2回	1
7月中旬	アドマイヤー 顆粒水和剤	5,000~ 10,000	収穫14日前	2回	1

2 白斑葉枯病・軟腐病・りん片腐敗病の防除

白斑葉枯病の発生が確認されています。多湿条件下で、25℃以上の高温では軟腐病、18℃前後の比較的低温ではりん片腐敗病が発生しやすくなります。手取り除草や激しい降雨など茎葉が損傷すると傷口から菌が侵入感染します。7月以降の手取り除草は控えてください。また、降雨状況に合わせた防除を実施してください。

表2 たまねぎ病害の防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数	白斑葉枯病	小菌核病	べと病	軟腐病
7月上旬	オルフィンフロアブル	2,000~3,000	収穫前日	3回	1	○	○		
	バクテサイド水和剤	500~1,000	収穫7日前	5回	0				○
7月中旬	フロンサイドSC	1,000~2,000	収穫3日前	5回	1	○		○	
	アグレプト液剤	1,000	収穫7日前	5回	0				○

<かぼちゃ>

1 果実斑点細菌病の防除

多湿条件下で発生しやすいため、開花7日前頃から予防防除を実施してください。

【主な症状】

- 葉：水浸状の小斑点、降雨が続くと葉脈に囲まれた病斑となり、中心部が破れる。葉の縁から水浸状に変色して、やがて黒褐色になり枯れ上がる。
- つる：水浸状に陥没し、やがて白色の紡錘状病斑となる。
- 果実：始め幼果に水浸状でやや陥没した病斑を形成、やがて周囲が隆起する。

表3 かぼちゃ果実斑点細菌病の防除薬剤

薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
Zボルドー	500	—	—	薬害軽減のため、クレフノン200倍を加用し、高温時の散布は避ける。

2 アブラムシの防除

本年はアブラムシの発生が早く、すでに発生が確認されています。防除の際は、ミツバチへの影響を考慮しミツバチへの影響が少ない薬剤を選定しましょう。

〈注意点〉

- ・ミツバチを導入する場合は導入前に、ミツバチへの影響が少ない薬剤（モスピランSL液剤）で防除を実施してください。
- ・ミツバチ導入後も、活動に影響の少ない薬剤（モスピランSL液剤）を選択し、活動が活発な時間帯（午前8時～12時）の散布は控えてください。

表4 アブラムシの防除薬剤例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
着果前～着果期	モスピランSL液剤	2,000～4,000	収穫前日	2回以内
着果後	エルサン乳剤	1,000～2000	収穫3日前	3回以内

※薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

※薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。